

島地黙雷の治教論

新 田 均

はじめに

明治六年十月から八年五月にかけて展開された真宗の大教院分離運動は、大教院そのものの解体という結果をもたらした。直接統制から間接統制へと明治政府の宗教政策が移行する重大な転換点となった。この運動を指導したのが島地黙雷である。彼は政治的に指導したばかりではなく、多彩な言論活動を通してこの運動に思想的裏付けを与えることに努めた。この時彼が展開した議論には多様な要素が含まれている。従来は、信教の自由・政教分離といった観点からのアプローチが一般的であったが、近頃では所謂「国家神道」との関連から「治教論」が着目されるようになって来ている^①。しかし、「治教論」そのものについては、八神道^②古代の天皇政治に対する尊称、あるいは尊王の儀礼的表現^③「治教^④非宗教^⑤」と見る論理、といったような簡素な解説がおこなわれているにすぎない。したがって、所謂「国家神道」なるものとの関連において、彼の「治教論」が重要な位置を占めているとすれば、やや立ち入った形でその議論の見取り図を作っておくのも無駄ではないであろう。

こうした考えから、本稿では黙雷が初めて治教論を本格的に展開した「教部改正建議」^⑥と、そこで展開した「治教論」に基づいて三条教則・十七兼題に独自の解釈を加えた「三条弁疑」^⑦「十七論題修斉通書」^⑧を中心として黙雷の治教

論を分析する。

一 帰国から大教院分離運動開始まで

明治六年七月十五日、海外教状視察を終えて帰国した島地黙雷は、報告のため早速帰山するつもりであった。ところが、たまたま西本願寺法主大谷光尊が近く上京する予定になっており、そのまま東京に留まるように、との指示を受けた。こうして彼は教部省ならびに大教院の実状を見ることになった。

黙雷は滞欧中から教部省政策についての情報を得ており、様々な批判をおこなっていた。そして、教法を政府が左右しようとするのは文明に反するものであり、そのような教部省は近く必ず廢省になるであろうと予想していた。しかし、まだその時点では教部省の解体へ向けて自らが積極的な行動を起こすことまでは考えていなかったようである。教部省・大教院の実態はその決意を促すに足るものであった。とりわけ、我慢がならなかったのは大教院における造化三神の奉祭である。彼の目にはこれこそまさに「一向専念之宗義」を湮滅するものと映った。黙雷は教部省・大教院の解体を目指して運動を開始した。

まず、真宗の有志を募って大教院からの同宗の分離を決議し、次いで、他宗の管長教正へも大教院からの分離(すなわち、大教院解体)を呼び掛けた。しかし、他宗は神官による圧迫を恐れて同調せず、結局、真宗のみが大教院からの分離を企てることになった。

ただし、黙雷は大教院の実状のみを見て直ちに教部省・大教院の解体に動きだしたわけではない。仏教界に働きかける一方、彼は教部省の意図を確認することに努めた。そして、大教院の実状が教部省の意図を反映したものであることを確信すると、六年十月五日、所謂「大教院分離建白」を参議伊藤博文・同大隈重信らに提出し、いよいよ教部省・大

教院解体に向けて本格的な活動を開始した。

この建白の中で黙雷が行なっている批判の要点は以下のようなものである。

- ① 教義の異なる諸宗派が合同で布教することは民を惑わすだけである。また、神仏分離の方針に反する。
- ② 最近聞くところによれば諸府県に中教院が置かれ、その体裁は大教院に倣うということである。とすれば、中教院は大教院と同じ四神を祀る神社となり、延いては小教院(神社仏閣)もすべて神社に変えられてしまいうらう。
- ③ 教義の異なる宗派であっても、政治を助け、風俗を正しくし、三条教則に反しないものは自由に布教させるべきである。三条教則を教義と見做して各宗派の教義を統一することは宗教を廢滅するものである。
- ④ すべての人民に漠然とした古史を信じさせることはできない。強いてこれを信じさせようとするれば、却って人民の反発を招き国家にとって有害である。

このような批判の後、大教院の現状は教部省の意図に出るものであるとして、「豈諸教ヲ通轄スルノ省体ナランヤ」と非難した。そして、次のような要求を提示している。

「仰願ハ 朝廷公正、其間ニ偏頗ナク(其合スヘカラサル者ヲ強合セス)、其変スヘカラサル者ヲ誣変セス、夫ヲシテ各独立セシメ、満邦ノ諸教ヲシテ悉ク朝恩ニ沐浴セシメハ、民ノ恩化ニ舞踏スルヤ、三章ノ旨趣徴セスシテ実ヲ輝スニ至ラン云々」。表現がやや曖昧であるが、大教院の解体を要求しているのは確かである(したがって、この建白を「大教院分離建白」と呼ぶのはあまり適切ではないと思われる)。

ところで、藤井貞文氏がこの建白の草案ではないかと推測されている『島地黙雷全集』第一巻所収の「大教院分離建白」では、この部分は「伏請朝廷公正其間ニ偏頗ナク、各信教ヲ自在ナラシメ、臣等ガ志ヲシテ官職ヲ脱シ之ヲ独立セシメ玉ハ、朝廷自ラ用捨ノ權ヲ採ラスシテ僧侶自ラ興廢ヲ己レニ資メン。」となっている。ここには教部省解体の意図が顕にされている。

「大教院分離建白」の直前に起草されたと思われる「上聞 教部省ノ不体裁ニツイテ」においては、教部省解体の意図がもつと明瞭である。「僧侶ノ儀ハ神官ト其管轄ヲ異ニシ、僧侶ヲ策進シ、寺院ヲ保護スルノ局ヲ設ケ、諸宗各其宗規ヲ以テ檀徒ヲ教化シテ云々」。これ以後黙雷は、左院や政府要人に対する彼個人の建白活動においては教部省解体という急進的な線で運動を進めていく。

一方、真宗教団も十月三十日、真宗管長代理権少教正藤枝沢衣が教部省に「真宗教院事務分離取扱所別立ニ付伺」を提出して大教院分離運動を正式に開始した。この伺いは、仏教諸宗が本来「就学研究、旧弊一洗」を目的して設立を願ひ出た大教院が、今日では「神道并ニ七宗ノ説教場ノ如ク相成リ、教義混濁、民心疑惑ノ弊」を生ずるに至っていると指摘し、大教院から分離して独自の布教活動を展開する許可を求めたものである。ここで要求されているのは飽くまでも大教院からの分離であって、大教院の解体でも教部省の解体でもない。曰く「所謂不可同者ハ教法ナリ、可同者ハ三条ノ教憲ナリ。共ニ奉スヘキハ本省ノ規則、共ニ行イ難キハ教院ノ事務ナリ。」以後、真宗教団としては、三条教則の遵守を前提とした大教院分離・独自布教という比較的温和な線で運動を展開していく。

このような黙雷個人と真宗教団との主張の相違は戦略的なものであったのではないかと思われる。教団として動く場合、彼は表面には出ていないが、教部省に提出する文書の起草を行なう等、裏から支える或いは指導するといった役を演じている。また、新聞・雑誌等の言論機関を活用する場合には、匿名・変名を多く用いて真宗の運動を支持する世論づくりを試みている。三役を演じ分けた巧みな言論活動によって、大教院分離運動は黙雷個人の主張から見れば若干物足りない、しかし、教団の主張から見れば十二分な、大教院解体という結果になった。

当時、政治的な主張を掲げて言論活動を行なおうとすれば、公式には左院への建白の提出、神官・僧侶の場合には管轄官庁たる教部省への願・伺の提出、非公式には民間言論機関への寄稿・投書、政府要人への建白の提出等の手段があった。こうした手段を縦横に駆使しながら、彼は当時次のように書いている。

「若シ其政令公正ナラズンバ、之ヲ諫争シ之ヲ匡救シ、以テ公正ニ至ラシムベシ。若シ我諫匡ノ力ヲ尽サズ、輒自勃然不平ヲ唱言シ、党類ヲ囂聚シテ禍乱ヲ煽興スル如キハ、害ニ尊上遵政ノ意ナキノミナラズ、非ヲ正サント欲シテ我レ自ラ非ニ入り、害ヲ救ハント欲シテ翻テ害ヲ施ス者ナリ。……況ヤ方今明聖臨御、賢良路ニ当リ、政令公正億兆ヲ子視シ、衆庶ノ言門ヲ開キ、賢才ノ進路ヲ通ジタマフニ至テハ、何ゾ言ヲ惜ンデ尽クサバランヤ、何ゾ能ヲ秘シテ奉ヘザランヤ。夫奉戴ト云ヒ遵守ト云フ者、徒ラニ拝奉伏戴ヲ云フニハ非ズ。要政旨ノ所在ヲ体認シテ眷々服膺協力愛護シ、国威ヲ万邦ニ光輝セシメテ、君徳一点ノ汚辱ナキニ至ラシムルニ在リ。……争臣・争子、君父ヲ匡救スルヲ忠孝トスルトキハ、愈々知ル、奉戴遵守ノ誠心アル者ハ、腹心ヲ吐露シテ忠愛ヲ献ズベシ。」

二 大教院分離運動の展開

明治六年十月三十日、真宗管長代理権少教正藤枝沢衣が「真宗教院事務分離取扱所別立ニ付伺」を提出すると、教部省は、十一月十二日、神道諸宗管長と示談の上真宗内の諸教正が連署して伺出るように指示した。

そこで、十二月十五日、管長大教正大谷光尊以下真宗の諸教正は先の「真宗教院事務分離取扱所別立ニ付伺」に若干の修正を加えた「大教院分離伺」に連署し、これに分離後の大教院との関係を約した五箇条からなる「条約下案」(交際親睦之事、毎月一度会合之事、布教応援之事、異教防禦之事、学師更互之事)と神道乃仏教六宗の分離同意書(「添書」)を付して教部省に提出した。

こうして、真宗の大教院分離は簡単に成るかと思われた。ところが、「大教院分離伺」に連署した真宗の諸教正の内、代理を以て連署した五名に大教院が確認を求めたところ、その中の一人興正寺の華園摂信が、十二月十七日に分離不同意を回答してきた。このため、教部省は真宗内部の不統一を理由に、大教院分離伺・条約下案・大教院の添書を返却し、

大教院と真宗を呼び出して双方で協議することを指示した。こうして大教院分離運動は長期化する様相を呈し始めた。大教院と真宗の協議が続く内、七年四月四日になって大教院は、分離不可に院論が決定したため添書は与えない(但し、強いて留める心算も無い)との見解を真宗に伝えた。このため、四月八日、分離に反対している者(華園撰信と渋谷達性)を除いた真宗諸教正は再び先の「大教院分離伺」に連署し、それまでの経緯から最早話し合いの余地の無いことを説明し「大教院分離伺」の受理を求めた「願」を添えて教部省に提出した。一方大教院も、四月十九日、四箇条からなる別紙理由を添えて、院論が分離不可に決定した旨を教部省へ上申した。

これに対して、教部省は、双方が角逐しているようでは裁可しがたいとして、さらに熟議することを双方に指示した。これに依って大教院は、五月五日、真宗へ六箇条の質問提示し、五月十五日真宗がこれに回答を示し、六月十二日大教院がさらに反論を加えるといった遺取が行なわれた。この最後の反論において大教院は、これ以上の論争は大教院の醜態を曝すだけで無益であるとして真宗の回答を求めず、教部省の裁決に委ねた。

この遺取が続けられていた五月二十四日、黙雷は教部省・大教院体制を根本から覆す構想を盛込んだ建白を左院に提出した。「治教論」を展開した「教部改正建議」がそれである。

三 「治教論」の提唱

島地黙雷がこの建白⁽¹⁹⁾の中で展開している「治教論」には二つの意味がある。

一つは、文明開化の手段としての「治教論」である。彼は「朝旨ノ所在」は「因襲ヲ脱却シ文明ニ進趣スルコト」、すなわち文明開化にあるとし、このために政府がなによりも優先すべきは政治を公明にすることと、教育を充実させることであると主張する。そして、教育を「学」と「教」に分ける。「学」とは文部省が推進する「少年子弟」を対象と

した学校教育を指す。「教」とは「壮老婦女ノ学ニ就ク能ハサル者」を対象に、「文部普通ノ学ニ基キ宇内公行ノ条理ヲ主トシ産業経済修身齊家スヘテ文化ニ開導シ 朝旨ヲ領得セシムルヲ要」とするものである。彼はこれを「文明ノ治教」と呼んでいる。また、「文明ノ治教」は、「幽界冥理」を説いて人民に「安心立命」を与え、風俗を正し、人心を純良にすることによって「文明ノ治教ヲ翼賛スル」ことを役割とする「宗教」とは区別される。

ところが、現在の教部省の「立省ノ元旨」は「民ヲシテ開明ニ進歩セシムルニ在ル」のも、「各宗ノ教法ヲ興隆スルニ在ル」のでもなく、「一神道宗ヲ興シテ以テ外教ヲ防キ以テ国体ヲ維持セントスルニ在ル」る。これは——「文明ノ治教」が適宜政府が施行するものであるのに対し——、「宗教」が「教派自ラ別アリト雖トモ政ヲ害セス其国ヲ乱ラス忠信善良ニ帰著」する限り、「民ノ帰嚮ニ任スル」のが「文明諸国ノ通範」であることをまったく無視した措置である。したがって、「治教」と「宗教」の混淆を除くために教部省を解体し、

① 某省の中に「社祠寮」と「寺院寮」を置いて社寺を別々に管轄させる。

② 「文明ノ治教」は文部省に「教導寮」を置いて管轄させる。

③ 教諭の施設たる教院(文部省所管)においては四神の合祭を行なわない。

などの措置をとることを要求した。以上が「文明ノ治教」であり、黙雷が積極的な宣布の対象として論じているの専らこの意味での「治教」である。

これに対して、第二の意味での「治教」は第一の意味での「治教」を展開する前提としての「治教」——所謂神道非宗教論——である。ここにおいて黙雷は教部省が展開した宗教政策の基礎にある神道観に大胆な修正を加えることを試みている。

彼によれば、「神道」とは古代において行なわれた「落世安民ノ大政」——すなわち、善き天皇政治——の尊称にすぎない。彼はこれを「固有ノ治教⁽²⁰⁾」と呼んでいる(現在の言葉に直せば「皇道」ということになるという)。したがって、「神

道」の第一義は善政を施すことであり、天皇政治の神学的基礎を追求し、これを宣布することは重要な意味をもたない。それどころか、「維神ヲ政外ニ求メ神道ヲ宗門ト誤認スル者」は「本邦未曾有ノ私見」であり、「諸教ヲ廢シ百制ヲ滅シ上古草昧ニ復スル」ことを望んで文明開化を阻害し、「国体ノ名ヲ假テ帰嚮ヲ誣」いることで国民を分裂させて「他日皇室ノ大患ヲ醸ス」ものであるとして、徹底的に排除した。

だが、このことは直ちに、黙雷の内心において天皇が軽い存在であったことを意味するものではない。むしろ、自明の前提であったからこそ敢えて根拠を追求する必要を感じなかったともいえる。「国体維持ニ至テハ固ヨリ鼎鼐ノ関スル所万世ノ鴻制也上下誰カ之ヲ愛護セサランヤ」。これ以外にもそれを窺わせる言葉が彼の書いたものの中には散見される。「夫至尊至重ハ国体ノ定ル処、誰カ奉載拜趨セサラン。之ヲ口ニスルモ猶恐レアリ」。「本邦ノ皇統一系、万世無窮ノ至尊ナルハ、万国之ヲ承諾スル所ニシテ、誰カ之ヲ然ラズト云ハン」。「皇統一系ハ国体也。何ノ宗ノ者ト云ヘドモ、皇帝陛下ヲ異系ノ帝ト云フ者アラランヤ。又今後之ヲ改ムベシト云フ者、誰カアル」。

しかし、これらの言葉には自らの主張を弁護するための戦術といったニュアンスも感じられないではない。管見によれば、黙雷の天皇に関する記述の中で最も端的に自らの本心を告白していると思われるのは、内村鑑三の不敬事件を批判した文章である。⁽²³⁾

内村は「靈ナキ紙片ヲ拜スルハ基督教徒ノ禁止スル所ナリ」との理由から、御親影への拝礼を拒んだといっているが、それは内村の本音ではない、と黙雷はいう。「彼レ靈ナキニ托スト雖モ、其實密ニ圖書・彫刻ノ靈ナキガ為ニハ非ズシテ、彼等ノ眼中君父ヲ見ルモ唯朋友中ノ一種ト視ル迄ニシテ、必シモ忠孝ノ義務アルモノト認メザルヨリ、事終ニ此ニ及ベル者ナリ。」要するに、君主に対する敬愛の念の欠如が原因であるというのである。黙雷は「情」という観点から、これを激しく批判した。「画像・彫刻ヲ敬礼スルガ如キハ、畢竟自己愛敬ノ心情ヲ表象スルノ儀則ニシテ、然ク偏偏ノ理論ヲナスベキ者ニ非ズ。……我曹ハ中心君父ヲ愛敬スルノ情アル者ナリ。其写影ニ対ルヤ愛敬ノ念涌然トシテ

発スル者ナリ。之ヲ礼敬スルノ急ナル、亦靈ノ有無ヲ問フニ遑アラザルナリ。」つまり、彼の天皇観の根底にあるのは切々たる尊王の「情」なのであって「理屈」ではないのである。

そして、この「情」に関して敢えて理論武装しなければならぬ客観情勢も存在してはいなかった。彼の属していた真宗本願寺派は真俗二論の教義を保持して忠君愛国の路線を明確にしていたし、⁽²⁴⁾ 政治的にも長州閥との繋がりによって明治政府に対して大きな影響力を有していた。また、彼が訪れた西欧文明諸国においても未だ君主制が一般的であった。⁽²⁵⁾

それでは、「神道宗門」を「本邦未曾有ノ私見」とした場合、「神道宗門」が奉ずる神々ほどのように位置付けられたのであろうか。神々の中には皇室の存在と切り離せないものも多い。彼の著作を読むと神々を三つに分類して理解していたようである。まず、第一が「山川・草木皆神也」とするもので、これについては「是欧州兒童モ猶賤笑スル所ニシテ、草荒・未開是ヨリ甚シキ者ハアラス」⁽²⁶⁾として一蹴している。第二が所謂造化三神で、これも万法唯心を説き造化神を否定する教義と相容れないとして拒否される。そして、第三の神が祖先である。これについては、「我カ邦開闢ノ神ハ、即我ノ祖先タリ。万世億兆ノ基ヲ開ク、功德固リ輕淺ナラス。之ヲ崇敬セサルヘカラサル也」⁽²⁷⁾、「其人体ハ早く土ニ歸スト雖モ、其靈魂ハ不朽ニ存ス。其靈魂アル尚今日ノ人ト異ナルナシ」⁽²⁸⁾として、崇敬すべきものとした。

しかし、祖先の崇敬の手段となると、必ずしも神道式の祭祀を行なう必要はないという。「君父ノ意、只其臣子ヲシテ人行ヲ正シク知識ヲ明カニシ、各自ノ義務ヲ全フセシコトヲ欲ス。……忠孝ノ実、一二人道ヲ履踐シ人ノ人タル行ヲ誤ラザルニ在リ。……已ニ吾ガ義務ヲ尽サズ、而シテ君父ニ忠孝ナク只鈴ヲ鳴ラシ手ヲ拍チ、我レ能ク祖宗ニ事フト云フト雖モ、祖宗豈之ヲ享ケンヤ」⁽²⁹⁾、「崇敬ノ心有テ輕蔑ノ行ナクンバ、敬神ニ於テ欠クル所ナシ」⁽³⁰⁾。こうした見解を有する黙雷にとって、神宮大麻の扱いは厄介な問題であった。

大教院が真宗の見解に反論し、教部省に裁決を委ねると、七年七月十九日、教部大輔穴戸璣は神道乃仏教六宗管長と真宗管長を呼び出し、大教院の改制について協議することを指示した。真宗はこれに応えて、八月一日、以下のような

内容を有する「大教院改制意見書」⁽³⁵⁾を大教院に提示した。「教院ヲ改メテ議院トシ、説教所ニテモ學問處ニテモナク、素ヨリ何事ハ宗局ニ於イテス、只評議所トシテ神社ノ体ヲ改メ平屋トシ、四神ハ取除ケテ院外神道局ニ移スベシ。各宗局ハ院外遠近随意ノ所ニ設クベシ。説教ハ各宗各自ノ寺院ニ於テス、他宗教ノ人ノ交説スルヲ許サズ。」⁽³⁷⁾

この案に神官たちは同意せず、分離を承諾したが、教部大輔は次のような妥協案を提示した。「真宗ノ註文一々尤モナリ、只四神ノ内大神宮丈ハ真宗トモ敬神ノ表アル上ハ敬崇スルナルベシ。然ラバ三神ハ取除カセ、院体ハ議院ニテ神社ニ似タルハ改メルトモ、セメテ床ノ間ニナリト大神宮丈ハ在スベシ。其丈折合ナレバ他ハ我ヨリ説得スベシ。夫モ不折合ト有テハ真宗モ敬神マデイヤト云事ニナルベシ。併シ三神ヲ除クコト猶神官不折合ナラバ、彼等横論ナリ、其時ハ断然分離スベシ」⁽³⁸⁾。

この妥協案は黙雷の目に「一宗分離」という名目を放棄して「神七宗分離」の実を取るものと映った。したがって、どうしても拒否しなければならないという性質のものではないけれども、これを受け入れることによって一年以上に亘って不屈の努力を続けてきた分離運動の名目が失われてしまうのは「不堪残念」「不快極」なことであった。しかし、三条教則遵守(祖先崇敬)を標榜して運動を展開してきた以上天照大神まで否定したのでは「条理」に反する。こうして進退に窮した黙雷・赤松連城・石川舜台は決定を真宗の会議に一任した。この時の複雑な心境を彼は「小生一任セシハ其是迄行懸リシ条理難奈何事アルニ依テ也。別条理不立事ニ候ヘバ、小生奚ゾ傍観一任センヤ。小生周歲ノ苦辛固リ不快極ト雖モ、条理ヲ奈何セン」⁽³⁹⁾。

真宗の会議では教部大輔の妥協案を受け入れることが決定された。しかし、神官たちはこの案に同意せず、そこで安戸も「然ラバ真宗分離ハ当然ナリ。是迄真宗我論ニ分離ヲ募ルト思シニ、神官左程不服ヲ誣ニスル上ハ真宗ノ不従尤モ至極ナリ。」というに至り、教部省の省論も一変して「初テ分離請願ニ情実通暢セリ。」⁽⁴⁰⁾という状態となった。

本来であれば、この時点で大教院分離運動は終決するはずであった。ところが、九月十八日に、予てより大教院分離

に反対していた興正寺華園摂僧が西本願寺からの別派独立を教部省に申請したことから、分離運動は複雑化し、さらに長引くことになった。

この遅延した大教院分離運動が大詰を迎えた八年三月、西本願寺は黙雷が起草した「宗門教義上ニ相戻候大意」⁽⁴¹⁾を大谷光尊名で三条太政大臣に提出し、先の教部大輔の妥協案を受け入れた時の立場を再び確認した。

「皇大神ハ皇室ノ御宗廟ニ付何宗ヲ問ハス敬崇致シ候儀ハ本邦国初已来ノ定制ニテ国体ノ基ツク処現今皇室ヲ尊奉致シ候上ハ其宗廟ヲモ敬崇致候儀ニテ魂神賦与来世救済等ノ教法上ノ談ニハ無之候間真宗固リ之ヲ敬崇致シ候然ルニ造化三神ノ儀ハ近來一種ノ神道者流古事記ニ衣テ殊ニ之ヲ尊奉致シ其家説ノ教本ト致シ候儀ニテ右ハ必シモ御国体ニ関係無之自ラ宗教ノ位地ニ当リ候得ハ一人ニテ二宗ヲ兼候条理ハ毛頭無之殊ニ其説仏教所説ノ理トハ反対仕候得ハ苟モ仏祖ノ教ヲ奉シ候者ハ之ヲ主尊トハ仕リ難ク之ヲ主尊ト致シ候ヘハ仏祖ノ教ハ奉セサル者ニテ到底安立ヲ両様ニ致シ候事ハ宗門ノ本分ニ無之事ニ候然ルニ教院ノ制右ノ三神ヲ主神トシ本教固守ノ誓約迄モ致サセ候ニ付テハ宗教確信仕候者ハ是非トモ分離セサルコトヲ得サル所以ニ有之云々」。

この文書で重要なのは「現今皇室ヲ尊奉致シ候上ハ其宗廟ヲモ敬崇致候儀ニテ」の部分である。⁽⁴²⁾ここには黙雷の天皇観が明瞭に現われている。つまり、飽く迄も、皇室を尊崇するが故にその祖先たる天照大神を崇敬するのであって、祖先が神であるが故に皇室を尊崇するのではないのである。⁽⁴³⁾そして、三条ら政府中枢はこの見解を承認して、大教院の解体に踏み切った。

さて、以上のような「治教論」と真宗の教義である「真俗二諦論」との間には、明らかに、治教―俗諦、宗教―真諦の対応が認められる。⁽⁴⁴⁾言い換えれば、「治教論」は明治七年の状況にあわせて「真俗二諦論」を換骨奪胎したものである。その際、彼は巧みに三年一月の「大教宣布詔」中の言葉――「治教」――を借用し、自論の正当性の拠り所としたのである。⁽⁴⁵⁾

むすびに

本稿においては、専ら島地黙雷の「治教論」の見取り図を作することを試みた。そのため、「治教論」の政治的影響にはほとんど言及しなかった。また、思想的影響や位置にも考察を加えなかった。大教院分離運動についても必要な限りで言及したにすぎない。したがって、残された課題も多い。

「固有ノ治教」は政府主権の承認を得て真宗の基本路線となったが、「文明ノ治教」は政府の採用するところとはならなかった。黙雷と同じく神道非宗教論を唱えた大内青巒も祭祀についてはやや態度が異なるように思われる。⁽⁴⁶⁾ 同じ真宗の僧侶であっても造化神を認める者もいた。明治七年後半になると大教院分離運動の主要な課題は、華園摂信による別派独立要求や教導職制の変容などによって、教団自治権に移行していく。

以上のような問題に検討を加え、「治教論」の意義を明らかにすることを今後の課題としたい。

註

- (1) 羽賀祥二「神道国教制の研究——宣教使と天皇教権——」(『日本史研究』264)。阪本是丸「日本型政教関係の形成過程」(井上順孝・阪本是丸編『日本型政教関係の誕生』、昭和六二年、第一書房)。葦津珍彦著・阪本是丸註『国家神道とは何だったのか』(昭和六二年、神社新報社)等参照。
- (2) 明治七年五月二四日左院に提出。国立公文書館蔵「建白書明治七年申戌^{皇五月}四」(色川大吉・我部政男監修、牧原憲夫編集『明治建白書集成』第三巻、一九八六年、筑摩書房、所収)。
- (3) 明治七年九月『報四叢談』二号付録として刊行。二葉慈香・福嶋寛隆編『島地黙雷全集』第一巻(昭和四八年、本願寺出版協會)所収。
- (4) 明治八年二月『報四叢談』八号付録として刊行。『同右書』所収。

ちなみに、黙雷の執筆態度は「三条弁疑」と「十七論題修斉通書」とでは相当に異なっている。「三条弁疑」は、その冒頭で彼が述べているように、三条教則には自らが信仰している宗教と矛盾するところがあるのではないかという疑問を持つ宗徒たちのために、その疑問を解くことを目的として書かれたものである。したがって、三条教則を積極的に宣布することを狙ったものではない。これに対して「十七論題修斉通書」は、これを宣布しようとする熱意に溢れた大部の論稿である。また、十一兼題については「神道者ノ扱フ所、仏者ニ関セザル者間々存リ。是独リ真宗ニ障リアルノミナラズ、大衆ニモ亦障リトナレリ。故ニ教職検査ノ制、是レヲ被ラシメザルヲ則トス」(「瑞穂迥舎守国君ノ真宗論ヲ駁ス」『同右書』所収)、「神道者流講究ノ論題ニシテ、仏者ノ曾テ関係ナキ所ナリ。之ヲ説カザルハ真ニ仏者ノ教職タル所以ナリ」(「広島県下某氏ノ問ニ答七条」『同右書』所収)として一顧だにしていけない。このような姿勢の相違については後述するところから原因が明かとなろう。

三条教則

- 一 敬神愛国ノ旨ヲ体スヘキ事
- 一 天理人道ヲ明ニスヘキ事
- 一 皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守スヘキ事

十七兼題

人異禽獸、不可不学、不可不教、權利義務、文明開化、万国交際、皇政一新、政体各種、皇国国体、道不可変、制可隨時、法律沿革、国法民法、租税賦役、富国強兵、産物製物、役心役形

十一兼題

神德皇恩、人魂不死、天神造化、顕幽分界、愛国、神祭、鎮魂、君臣、父子、夫婦、大敬

- (5) この時、彼は真宗に対する満々たる自信に溢れていた。「滞欧間、宇内數十ノ諸教ヲ検査シ、利害得失ヲ斗較スルニ方テ、初テ吾大谷真宗ノ特別不共ノ妙宗ナルヲ知ル云々」「上書 分離ニツキ」(『同右書』所収)。

島地黙雷の治教論 (新田)

- (6) 詳しくは、拙著「島地黙雷の政教関係論―維新直後から明治六年前半まで―」(『早稲田政治公法研究』第二十五号) 参照。
- (7) 「欧州尤ヨリ今ノ教部省ニ似タル者ナシ。教法ハ皆僧家ノ手ニ託ス。是神為ニシテ政府ノ左右スルコト能ハサル者也。邦人無學ニシテ一日之ヲ存スト云ヘトモ、近日必ス廃省スヘシ。」「建言 仏教ノ衰頹」(『島地黙雷全集』第一巻、所収)。
- (8) 「抑神仏二宗ノ相審レサル素ヨリ其説水炭ヲナセハ、之ト共ニスヘカラサル云フヲ待タス。彼ハ造作神ヲ以テ所尊トシ、我ハ三世因果ヲ以テ教本トス。彼立ノ則ハ我ハ寔ル。我立ツ時ハ彼レ寔ル。決シテ同処ニ並立スヘキ者ニ非レハ、其分離スヘキ云ヲ待ス。」前掲「上書 分離ニツキ」。
- (9) 彼は既に滞欧中から、布教に当って政府の援助を受ける必然性を感ぜなくなっていた。それは、先にも引用したように、真宗に対する端々たる自信からきている。この自信は、真宗の教義こそ近代科学と一致するものであるとの見解に裏打ちされていた。「万法唯心ノ理ハ欧州究理ノ学者皆取ル所ニテ、今迄ハ教法ノ□ナル故云コト能ハス。思想ノ自由・議論ノ自由出来候ヘハ、必ス功ヲ造化ノ神ニ取ラス、万物因果、心ニ元付クヲ立可申候。其他ノ事ヲ云ヘハ実理ニ合ハヌ故、皆マケト成リ申候。決シテ仏ニ関セサルモノナレハ、之ヲ□負シテ取ルニハ及ハス候。何事モ此ニ目途ヲ取り候ヘハ、恐ル、コト少シモ無之、決シテ官ニモコヒス、一途一杖一蓋ニテ御門徒ノ手ヲ把テ、淳々不倦御化導可被成候。」前掲「建言 仏教ノ衰頹」。黙雷が布教の自由を主張した背景には以上のような確信があったのである。
- ところで、ここでの彼の動きを政教一致論から政教分離論へという図式で捉えるのは単純にすぎる。彼は洋行以前も、洋行中も、帰国後も終始一貫して「政教相衣」論者である。これは彼の書いたものを少し注意して読めば一目瞭然のことである。一例を挙げれば、明治四三年(死の前年)に法主に宛てた上書の中で「抑モ 國家ノ教法ニ於ケル、両輪双翼ナルヘキハ天下ノ通論ニテ、他ノ文明諸國ニ徴スルモ燦然タルコトハ窺下ノ實際親察シ玉ヘル所、亦喋々ヲ要セス。」(「上書 法主宛下へ」『島地黙雷全集』第一巻、所収)と述べている。したがって、明治六年の時点で変化したのは「政教相衣」の在り方に対する見解である。彼は「凡ソ物各區別アリ。政治ニハ政治ノ方アリ、軍隊ニハ軍隊ノ制アリ。宗教ノ人心ヲ支配スル、亦奚ソ宗教ノ法則ナキヲ得ンヤ。若シ是ヲ混淆雜糅セハ、百科ノ學術ハ何ニ衣テ分立セン。」(前掲「上書 法主宛下へ」)との見解に立って、政教

相衣を制度上のものから事実上のものへと切り替えた。

- (10) 前掲「上書 分離ニツキ」参照。
- (11) 「伺書 官員投書ニツキ 一」「伺書 官員投書ニツキ 二」「上聞 教部省ノ不体裁ニツキ」(『島地黙雷全集』第一巻、所収) 参照。
- (12) 藤井貞文「島地黙雷の政教分離論」(『国学院大学日本文化研究所紀要』第三十六輯) 所収(藤井氏が、早稲田大学蔵『大隈侯爵家文書』に収められている建白に、国立国会図書館憲政史料室蔵「伊藤公爵家文書」に収められている建白によって一校を加えたもの)。なお、これとほぼ同じ写本(旧重松家所蔵本)が『島地黙雷全集』別冊に収められている。『島地黙雷全集』第一巻所収の写本はこれらのものとは相当に異なっており、藤井氏はこれを前者の草案ではないかと推測している(「島地黙雷の政教分離論」三六頁)。
- (13) ここから、大教院・中教院の四神奉祀を義務づけた大教院規則・中教院規則の制定(六年十月二七日)が、黙雷に行動を起させる大きな要因になっていたことが分かる。この規則はまったく僧侶の承諾なしに定められたものであったらしい。「近來諸県下ニ皆中教院ヲ置カシメントス。其規則亦大教院ニ同ジ。右ハ諸宗僧侶ニハ曾テ此ヲ議セズ、専ラ省員ト祀官トノ手ニ編制上木致候由、祀官僧侶協同出仕スルノ中教院ナルトキハ、其編則モ祀官僧侶合議シテ之ヲ編成スベシ。然ルニ右專擅ニ上木配布スルハ、其規則僧侶ノ必ズ承諾セザルノ件アルヲ以テ也。到底分離別立スベキ者タレバ云々。」「神仏混淆ノ不体裁ヲ論ズ」(『島地黙雷全集』第一巻、所収)。
- なお、黙雷が行動を起した要因としては、この他既に述べたように、大教院の現状が教部省の意図に掛かるものであると確信したこと。また、征韓論による西郷の下野によって、政府中枢の勢力地図が真宗に有利なものとなったこと等が考えられる。
- (14) ここにおいて、三条教則に対する黙雷の態度は、「三条教則批判建白」執筆当時とは若干異なったものとなっている。「三条教則批判建白」においては、該教則を以て政府が新たに宗教を創造しようとするものだと捉え、真つ向から批判していた。しかし、この建白においては、「若第三章教則ト誤認シ、各宗ノ区説ヲ一ニセントセハ、是宗教ヲ廢滅スル者ニシテ云々」とし、各宗教

は「假令其説相反スルモ、扶政正俗ノ用ヲ播シ、三章ノ旨趣ニ戻ラシムハ可ナラン」(傍点引用者)と述べている。つまり、四条教則は積極的に布教しなければならない教義ではなく、各宗教が自らの教義を布教する際に抵触してはならない規則にすぎないとしたのである。こうして、彼の戦線の主正面是一片の法律(三条教則)からこれに実質的な拘束力を付与している制度(教部省・大教院)へと移った。

ちなみに、三条教則に対するこのような解釈が述べられている箇所を抜き出せば以下のようなものである。「三条ハ只宗教ヲ説クニ、此ノ条憲ニ障ラス様ニト政府ヨリノ注意ニシテ、政府固ヨリ教法ヲ作ル者ニ非ザレバ、教ト云ハ神仏各宗ノ教義ノ外ナシ。」「分離得失論ヲ駁ス」、「区々ノ教アリト云ヘトモ、三条ノ憲則ニ戻ラサシムル要スルノミ。然ラバ憲則ヲ奉スルハ同シト云ヘトモ、其説ク所ノ教ニ至テハ、神仏各宗差別スルコト勿論也。」「分離ノ原因ヲ難スルノ条」、「夫レ教則三条ノ如キハ、即チ規則ニシテ教ニ非レバ、説教ノ徒此ニ相戾ラザラシムルノ用意ナル者ノミ。」「神仏関係論」(いずれも、『島地黙雷全集』第一巻、所収)

(15) 国立公文書館蔵『公文録』2A-9-1公1452。

(16) 明治の建白制度の概要については、阪本是丸「明治初期の建白制度と政教事情」(『明治建白書集成第3巻月報』一九八六年一〇月)参照。

(17) 前掲「三条弁疑」

(18) 大谷光尊名で提出されたが、島地黙雷の手になるものであるといわれる(『島地黙雷全集』別冊、一二頁参照)。

(19) この建白は、本文(「教部改正建議」)と別添一通(「教部失体管見」「教部改正愚策」)からなっている。以下、ここからの引用については註を付さない。

(20) 前掲「三条弁疑」。「人間世上ノ事ニ於テハ固有ノ治教(所謂転輪聖王ノ法制)ニ従順シテ云々」。

(21) この姿勢は、造化の原因を問わず既存の理を追求する「万法唯心」の教義と深く関連しているものと思われる。ちなみに、天皇教治(国体)維持の役割も政治が担うべきものとされた(「文明ノ治教」はその一部)。「此レカ基ヲ固フスルハ最モ 廟堂

ノ担任ニ在テ要朝政公明ニシテ億兆々其処ヲ得ルニ在リ」

(22) 「三条教則批判建白書」(『島地黙雷全集』第一巻、所収)。

(23) 「教則及ビ合寺ヲ論ズ」(『同右書』所収)。

(24) 「涵詠楼主・戒鵬杯北氏ノ宗旨論ヲ駁ス」(『同右書』所収)。

(25) 「不敬事件ヲ論ズ」(『同右書』所収)。

(26) この唯一の例外がキリスト教であると思われる。

(27) 広如宗主の御遺訓御書(『本願寺史』第三巻、二五頁以下)、黙雷の起草した「真宗教導大意」(『島地黙雷全集』第一巻、所収)参照。

(28) 津津「前掲書」二八頁以下参照。

(29) 黙雷は各国の政体を比較して、「合衆共和」と「君民共治」を最善とし、このいづれを採用するかは「其建国ノ本ニ違ハズ、人民ノ習俗ニ応ズルヲ美トス」とした。そして、これに反したフランス、イタリアの混乱を指摘している。ただし、政体と国体とは別の範疇のものとしている(前掲「十七論題修斉通書」参照)。

(30) 前掲「三条教則批判建白書」。

(31) 註(8)参照。

(32) 「教法ノ源」(『島地黙雷全集』第一巻、所収)。

(33) 前掲「三条弁疑」。この中では、造化三神も祖先神に含められている。

(34) 「同右」。

(35) 前掲「広島県下某氏ノ問ニ答七条」。また、「神道宗門」としての儀式はまったく参列する必要のないものとする。「只国俗ニ順ジテ創業ノ功德ヲ追敬スルノミ。決シテ神道者流ノ宗儀宗式ニ従フベキ所以ナシ」

ところで、羽賀祥二氏は「治教」とは鎮祭の詔のいう祭祀を通じて、『孝敬』を示すこと、あるいは『全国民を統御する道』

としての神道儀礼を意味すると、島地は把えたといえよう。」(前掲「神道国教制——宣教使と天皇教権——」一三頁)と述べている。しかし、すでに書いたところから明らかなように、祭祀を通じての「孝敬」も神道儀礼も、彼の治教論においては消極的乃至否定的なものでしかなかった。

また、羽賀氏は同じ箇所「島地は『皇室ヲ重ンズル者ハ、皇室ノ基ク所、即チ祖先ノ神ヲ敬スベシ』と述べた」と述べている。しかし、「三条弁疑」にあるこの言葉は(『島地黙雷全集』第一巻、三七七頁)、三条教則に含まれている教部省の意図を推測して述べたものである。この言葉の前後を補って引用すると「当今官ヨリ敬神愛國等ト掲出セシ者ハ、……此制ヲ設クル意、実ニ皇統無窮ノ国体ヲ維持センガ為ナリ。今ノ皇室ヲ重ンズル者ハ、皇室ノ基ク所、即チ祖先ノ神ヲ敬スベシトスル、亦必ズシモ理ナキニ非ス。」となっている。したがって、この箇所を黙雷自身の考えを述べた言葉として引用するのは適切ではないと思われる。

(36) 「真宗分離始末」(『島地黙雷全集』第一巻、所収)五三八頁。

(37) 「書簡九(阿満得聞宛)」(『島地黙雷全集』第五巻、所収)一九八頁。

(38) 「同右書簡」。この部分は、大教院分離運動が進行する過程で、教部省も、各宗に共通する敬神の内実を天照大神一神に絞ることに同意せざるをえなくなったことを示すものとして重要である。

(39) (40) 「同右書簡」。

(41) 国立国会図書館憲政史料室蔵『三条実美文書』に二つ収められている。また、同文書には、これらとは若干内容の異なる「宗門教義上相戻候大意」が一つ収められている。

(42) 「宗門教義上相戻候大意」にはこの部分がない。

(43) このことは次の言葉からも明瞭である。「皇帝ノ如キ、仮令其ノ遠祖神ニ非ルモ、開国以来帝統一系ナルニ於テハ、誰カ敢テ之ヲ疑ハシ。爾ラバ鼎新ノ動クベカラザル、実ニ万世不動ノ確位也。」「神仏關係論」。ちなみに、神宮大麻の崇拜については、後に「大麻ハ年々春初ニ配布スル者タレバ、神体ニ非ルコト分明ナリ(若神体ナラバ如何ゾ年々新ニ之ヲ配布セン)」(『広島県

下某氏ノ問ニ答七条」)と述べている。

(44) この意味で、明治二年九月の「真宗教導大意」の中で黙雷が展開した「真俗二諦論」は、「治教論」への前提をなしていると思われることも可能である。

(45) 「彼ノ宣教使ヲ設ケ玉ヘル聖詔ニ、治教上ニ明ニシテ、風俗下ニ美也、ト云ヘルハ、決シテ宗教ノ事ニ非ルヘシ。然ルニ、神道者流之ヲ曲解シ自家ノ説ヲ主張シテ他説ヲ圧服セントス。此レ宗教治教ノ別ニ暗キカ致ス処ニシテ、今臣下カ治教ト云フ所以の者ハ、全ク彼ノ聖詔ノ意ヲ奉スル者也。」「教導職ノ治教宗教混同改正ニツキ」(『島地黙雷全集』第一巻)六六頁。

羽賀祥二氏は大教宣布および鎮祭の詔の位置付けについて論じた際に、「島地黙雷はこうした詔のもつ問題を詔の『治教』という表現と関連させて、次のように的確にとらえている」(前掲論文「一三頁」)として、明治七年の「開国私言ヲ読ム」——「彼ノ宣教使ノ如キ、只治教ヲ宣布スルニ出ス、固リ宗教ヲ是非スルニ非ル也——を引用している。羽賀の指摘に「後になって」という限定が含まれているとすれば問題ない。しかし、もしも「詔が出された時から既に」というのであれば問題である。明治七年の史料は明治三年のことを直ちに証明するものではない。また、明治三年の「建言 四ヶ条御垂問ニ奉答」(『島地黙雷全集』第一巻、一〇七頁)には「宣教使御差出シノ朝議、全政教一致ニ原キ、敬神ヲ以テ政ノ根本ト被遊、奉ル所ハ神徳、教ル所ハ神道、敢テ他ニ求メス云々」(傍点引用者)とあって、むしろ詔に神道宗門の宣布を見ているように思われる。

(46) 「神仏混淆改正之議」(『明治建白書集成』第三巻、所収)参照。

(47) 榎丘宗興「二十八願辯略」(『明治仏教思想集成』第三巻、所収)参照。